



BSE検査が 変わりました

岡山県では、これまで全頭を対象に続けてきたBSE検査を見直して、平成25年7月1日から、生後48か月を超える牛のみを対象に検査を行うことにしました。(BSE:牛海綿状脳症)

Q BSEってどんな病気だったかな？

A ■ BSEは牛の病気の一つで、「BSEプリオン」と呼ばれる病原体が、主に脳にたまって、脳の組織がスポンジ状になり、異常な行動などを起こし死亡させるものです。

■ この病気は、BSEにかかった牛の肉・骨などを、牛の餌に使ったことが原因で広がったと考えられています。

■ BSEプリオンを食べたことが原因で、ヒトが同じような病気(変異型CJD)になることがあると考えられています。

Q BSEの対策として国内では何をしてきたの？

A ■ 牛の肉・骨などを牛の餌に使用することを禁止しました(飼料規制)。

■ 食肉処理する時に、BSEプリオンのたまりやすい脳や脊髄など(特定危険部位)を、取り除いて焼却処分することにしました。

※若い牛では、BSEに感染していても、BSEプリオンは検査部位にたまっていないため、BSE検査で見つけることができない場合があります。BSE検査の本来の目的は、発生状況を調べることであり、BSE感染牛でないことを保証することではありません。

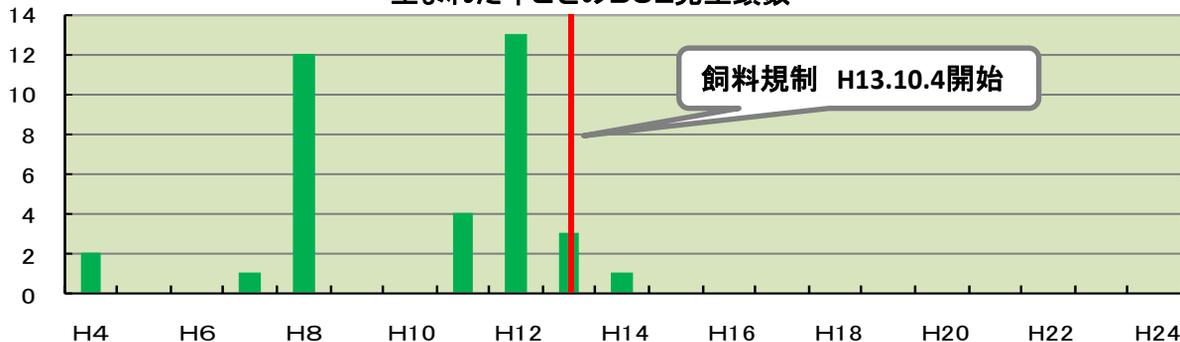
Q BSEの発生はなくなったの？

A ■ **国内では、平成14年2月以降に生まれた牛でBSEの発生はありません。**

■ 飼料規制後に、BSE牛はほとんど生まれておらず、BSEの対策には飼料規制が有効であったことがわかります。

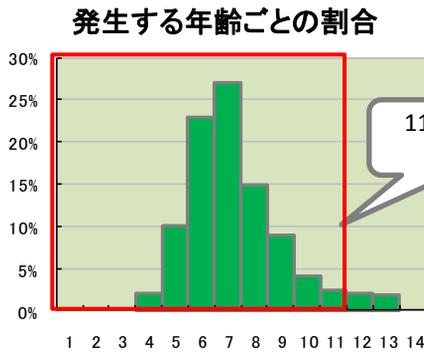
(飼料規制開始のH13.10.4以降に生まれたBSE牛の2例は、普通とは異なるタイプで、感度の高いマウスでの感染実験で、感染性が認められていません。)

生まれた年ごとのBSE発生頭数



資料:厚生労働省

Q そんなことで本当に大丈夫なの？



資料:内閣府食品安全委員会

A

■ 発生頭数の多いヨーロッパ連合(EU)において、BSE牛は満11歳までにほとんどが発見(96.9%)できています。

■ 国内では、11歳になるまでに95.8%が食肉処理されています。

国内で11年間もBSE牛が見つかっていないことから、国内にはBSE牛がもうほとんどいない、と言うことが予測できます。

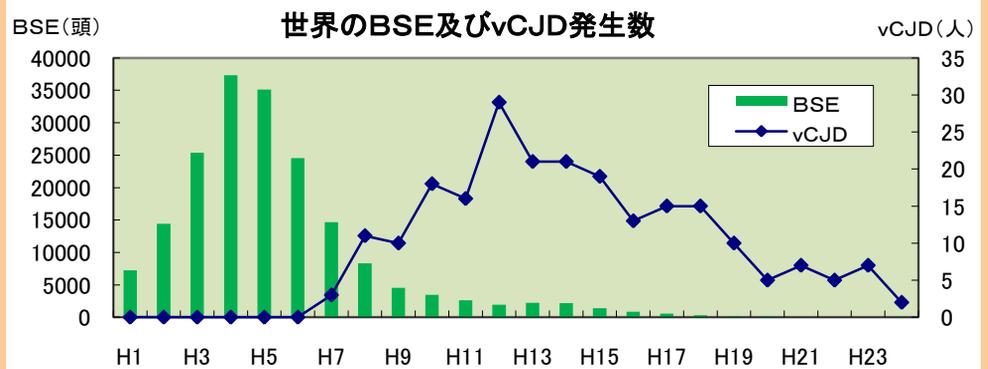
以上から、今後、国内でBSEが発生する可能性はほとんどないと考えられています。

Q ヒトが同じような病気(変異型CJD)になることもなくなったの？

A

■ 輸入牛肉の規制や飼料規制、食肉処理時の特定危険部位の焼却処分を徹底しているため、国内で変異型CJDが発生する可能性は極めて低いのです。

■ グラフから、世界においてもBSEの発生と同様に変異型CJD(vCJD)の発生が減っていることがわかります。



資料:厚生労働省

Q 発生する可能性が低いのに、なぜ、48か月を超える牛で検査を続けるの？

A

■ もう少し検査を続けて発生のないことを観察すれば、生後11歳になっていない牛についても、さらにはっきり大丈夫と言える状況になるからです。

■ これまでのBSE牛の発生実績や牛を使った実験で、ほとんどが生後48か月を過ぎるとBSE検査でかかっていることがわかるようになること、BSEプリオンを少しだけ食べた牛は、かかっていることが分かるのが遅くなると考えられており、そういう牛がいる可能性があることから、48か月を超える牛で検査を続けます。

高齢牛の中にいる可能性のあるBSEや、高齢牛に多く普通とは異なるタイプのBSE(非定型BSE)も、48か月を超える牛を検査することで、カバーができると考えます。

これらのことから、岡山県では月齢が48か月を超える牛を対象に、BSE検査を実施することにしました。

